
オレとうさぎと時々アネキ

福壳柚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレと「つむぎ」と時々アネキ

【Zマーク】

Z6270E

【作者名】

福壳柚

【あらすじ】

男子校に通うオレ」と藤岡涼はひょんなことから学園一イケメンの先輩、隼海生を助けてしまって・・・?目指すは、ドキドキラブコメ&ギャグです。興味のある方はぜひ。。。

出会い系 + 大人の階段

拝啓、親愛なる姉上サマ。

毎月毎月オレ主人公の腐れ小説を都会に一人暮らししているオレの所にわざわざ送つていただきありがとうございます。
お礼を申し上げると共に、姉上の弟として生まれてきたことを悔やんでいます。

前置きが長くなりましたが、お元気ですか？

オレは元気です。

前の手紙に姉上は『彼氏できた？』と言つていましたが
オレは男です。『彼女』は出来ても『彼氏』を作る趣味はありません。

またまた話がずれましたね。まったく、誰のせいなんだか。
あ、決して姉上のことじやありませんよ。決してね・・・。

高校はとてもたのしいですよ。

最近、調理クラブで先輩にほめられたばかりです。

今度帰つてきたときは姉上の大好きな『プリン』をバケツに作つて
おくので楽しみにしていてください。

最後に。

オレはホモじやねッ

*

もう人なんて信じない

*

幽靈だと思った。

こんな夜中にしかも大雨の日、傘も差さずにじずぶぬれになっているなんて。

性別は男、制服がオレと同じ高校でたぶん先輩。ベンチに座つたままピクリとも動かない。

オレは、と傘を握つて近づいた

「あの・・大丈夫ですか?」

すつと先輩に傘を傾ける。

ポタポタと先輩の頭から雨がしたたり落ちる。制服の濡れ具合から、かなり前からいたと思つ。

「死んでないですよ・・ね?」

顔を覗き込もうとしゃがみこむと薄く先輩が口を開いた

「かつてに殺すな」

声が枯れていって聞き取りにくかつたけれど、一応死んでなかつたようだ。

オレはほっとして緊張していた体を戻す。

「お前、誰？」

「オレ? あ、すみません。藤岡涼つて言います」

「ヨリリ」

「あの、先輩の名ツ！――！――！」

卷之三

傾いた体をオレは反射できに受け止めた

「だつ大丈夫ですか！？つか熱い・・・」

「すまん・・なんでもツない」

ぐいっとオレを押しのけて立ち上がるうとする。雨はいつのまにか晴れて、辺りに光が差し込む

「なんでもなくないですかーー。オレの嫁いりから近いんでやで少し休んで下せー」

「だが

「行くんです！……！」

ためらう先輩を強引に自分の家に引きずるオレ
ボタンと一つ先輩の髪から雨が落ちた

•

出会い + 大人の階段（後書き）

こんにちは^ ^

今度の作品は長続きするようにがんばるのでよろしくおねがいします。
す。。

「うーん・・・。ちょっと熱がありますね」

「やうか？・・・。そういえば体が熱いような・・・」

「ちょっ、自分の体ぐらい自分で把握して下さー」

ひえぴたを先輩のおでこに貼つて適当に布団で寝かす。

オレって本当におひとよしだよな・・・。

いくら、学校の先輩にあたる人だからって一応見知らぬ人を自分の家に招きいれてるんだから。

てか、この先輩めちゃかっこいい・・・。

よく見てみると鼻の筋が通つていて、少し濡れてる髪が色っぽくて、メガネが妙にマッチして・・・

つてオレ、ナーベルてるんだよッ！――――――！

「藤岡・・・だつたけ？一年生ですか？」

「あ、違こます。一年生ですか」

オレってそんなに幼く見えるのか？

「転入生？」

「そりなんですよ。先輩つて詳しいんですね。一年生の人数が把握できるなんて」

「いや、だつてオレ一年だし」

は？ オレと同じ年い？

ありえないッだつてオレより背高いし・・・大人っぽいし

「やつぱし、三年に見えた？」

「うそ」

目の前の先輩だと思つてた男は苦笑いをした。

「じゃあ、オレの名前は知らないな」

「え？ 学校に入れればみんな知ってるの？」

「ヤリと笑う。

オレは不覚にも一瞬その姿が色っぽいと思ってしまった。
男は起き上ると隣に座つて居るオレを押し倒した

「うわっ、なにすんだよ」

「知ってるよ、みんな。そオレの名前を知らない奴なんて」

「だ、誰か一人ぐらい知らない奴いるんじゃないかな？」

「この体勢が恥ずかしくて、オレは話をそらす
身をよじつて逃げようとするが、体格の差なのがビクともしない。

「やうだな・・・。ああ、いるとしたら」

男がオレの脣をすうっとなぞる
ゾクゾクとオレの仲でなにかが駆け巡った

「お前だけ」

男はメガネをとつて床に置く。
唇にあつた手を頬の方に移動していくと顔が近づいてくる

「ちゅっ、なにすん——」

ふにゅ。

実際、そんな音が出るはずもなくただ、オレの頭の中に響いた。
最初は長く、ただ触れてくるだけだったのに、だんだん舌が口に進
入するようになってきた

「やめ・・」

「口、ちゅっと開けて」

人の話を聞けッ！！！！！！

つか、まだ出逢つて数時間の見知らぬ・・まあ同級生になるけど
そんなやつにキスされるなんて！！
しかも男！！

「これじゃあまるで

この前アネキが送つてきたあの『ホモ』小説と同じあねーか！！！！

「オレにキスされてて考え！」としてるなんていい度胸してる

「んんっ・・・」

角度を変えて舌を入れられる

甘い疼きが体に伝わって、男はオレのズボンに手をかける

「やだつ、なにすんだよ」

「なにって・・・・色々？」

色々?じゃねーしツ————!

「大丈夫、気持ちよくしてやるから」

大丈夫でもね————よ————!

オレはジタバタと抵抗するが、力でねじ伏せられる
そうしてるうちにズボンにあつた手がチャックを開ける
サーっとオレ自身が冷たくなるのが分かつた

ヤバイヤバイ!!!!このままじゃ童貞の危機だ!!!!
ヘルプみ————!!!!

「やだつやめりひ」

無駄だと思つてもオレはジタバタと抵抗する。
鬱陶しくなつたのか、男はオレの足を持つて器用に空いている手で
ネクタイを取つてオレの足に縛り付けた

本格的にやばい。。。。

「オレはお前が寒そうだつたから入れただけなのに、なんで・・な
んでこんなことされなきやなんねーんだよ！－！－！」

「オレの名前しらない罰。」

「んなもん知るかー！オレ来たばつかだぞ」

男はじつとオレの顔を見つめる。
何故か、オレの顔がが熱くなる

黒い瞳が不意に揺れた

「じゃ、今から知つて。オレはどんな奴なのか、どんな性格してゐるのか」

ちゅつとオレの手をとつて甲にキスする
そのまままた、オレの顔に男の顔が近づいてきて

カステラ一一番電話は二番へ

これこそMK3つて時に、軽いメロディーが流れて男の動きがぴたつと止まった

発信源は男のケータイからで、めんどくせやつにオレにのかつていてた体をどけて電話に出た。

まあとにかく・・・

たすかつたあ！！！！

もしもあのまま事が進んでいたら一生トラウマになつてたかも
ケータイに電話してくれた人に感謝！！！！

オレは足にしばってあつたネクタイを外そつと起き上がりつた時
電話が終わつた男が一ヤリと笑いながらまた近づいてきて、オレの
耳元で囁いた

「同じクラスになれるといいな」

「なつ……」

誰がつなるか！…と言おうと顔を上げると、また男に口を塞がれ、
今度は甘い液体を飲まれた。

甘さのせいで頭がクラクラする

「ジーせお前のことだから騒ぐだらうから、口で寝てて」

「はい？」

あ・・・なんか目の前がかすんできた
ねむ・・・なんでだろ

「あつがとつ、少し熱取れたと思つ」

ちゅつとまた軽くキスされる

オレはあまりの眠たれどまおーとわれらがままになつていた。

「オレの名前
だかり」

なに？聞こえない・・・あ・・・眠い

なんか田の前が見えなくなつてくる、結局・・名前なんだよ

「あれ？寝ちゃつてゐる。じゃ名前わからんないままか・・・。まついいか」

寝てないつーの。

てか、本当に名前なによー！

「じゃあ、また明日。アリベテルチ
アリベテルチ

男は最後にオレになにか言つたけど聞こえなかつた
そして、オレは深い眠りについた

*

頭がガンガンする・・・。

絶対アイツのせいだアイツが眠り薬なんか勝手に使つからだ

会つたら血祭り決定。。

イライラとムカムカを抱えたままオレは学校へ向かつ。

右手に地図、左手にカバンとなんとも奇妙なかつこうのオレは案の定、登校中の他校生に変な目で見られた。

「こ、こじがオレの通う学校う？」

空いた口がふさがらない。

いや、だつてや田の前にお城のような校舎が立つてたら誰だつて驚くでしょ？

オレは右手に持っていた地図をしまって校舎内に入りひと校門をくぐりひとつ歩を

踏み出した・・・・・はずだつた。

「あやああああ…！…椿^{ツバキ}くんよ…！…！」

は？

そう思つた次の瞬間、ざわざわと流れあわせでざわめいていた辺りが

静かになり、道の真ん中が誰かが通る音が聞こえていた。

なになに…? なんか通るのかよ?

てか、これって空けるべきか…?

なにがなんだか分からず立ちはだかっていた。

「君、早く抜けたほうがいい」

「え?」

ぐいっと、どこからか手が伸びてきて、オレを道の真ん中から引きずりだしてくれた。

「あ、ありがとう」

オレはぺこりと頭を下げる。

助けてくれた、いかにも優等生ですって感じほメガネくんはメガネをくいつとあげるとため息交じりに言つた

「君なんでどけないわけー？一年登校してれば分かるでしょ」

「え？ なんでオレの学年知つてるの・・」

「ネクタイの色が緑色だから。・・・君そんなことも知なかつたの？」

いかにも呆れたって顔で見てくるメガネくん。
オレはむつとして言い返した

「んな」と知るわけねーだろ。オレ、今日初めてこの学校に来たんだから」

「へ？」

きょとんとメガネくんはオレを見つめる。

数十秒後、オレの正体が分かつたらしく、ぽんと手をついた。

「あー・・・悪い。」

「別に。ねえそれよりなんなのこの道」

「ああ。君、今日からこの学園に通つなら知つといったほうがいいよ。口で説明するのはめんどくさいから、見ててよ」

顔に似合わずめんどくさいとか言つなよメガネくん。

普通、そこはきちんと分かりやすく教えてくれる所でしょ？！
てか、この学校がどうなつてんの？まさか、実は超金持ちが通う学
校で、四天王的な人たちがいて特別あつかいされてるとか・・・。
まさかこんなアニメぢくな話があるはずないよなー。

「！」の学園には四天王と呼ばれるやつらがいて

ええーーーまさかの四天王登場！？・・本当にあるんだ。
てことは、かなりの美形とか？いやいや、まさかそんなに都合のいい話なんて

あるんですね。

いや、オレ別に四天王の一人の顔見てないよ
でもさ、このキャピキャピ声聞いてれば大体わかるでしょ。

さあどんと来い!! オレもうなにも驚かないぞ!!

「コイツがその一人」

メガネくんは嘲笑しながらすつと指した

オレは必死に見ようとぴょんぴょんと157cmの小さい臂で見ようとする。

でも、口口は男子校。普通の高校生が通っているわけで、オレより

でかい奴がわんさかいて前が見えない。

そんなオレの姿を見かねたのか、メガネくんは前にいた数人の男子に話かけ、なにかを交渉しはじめた。

数分後、交渉は成立したらしく、あつさりと前をどけてくれた。

「ねえ、なんで男子なのに男子にキャーキャー言つてんの？」

「みんなあこがれてるからだよ」

「あこがれ？」

「そ。君もじきに分かるよ」

不意にキャーと言つ声が大きくなつてきた。

煩くて耳を塞ぐと、メガネくんは苦笑いして、道の方へ視線を移した
つられてオレも視線を前に移すと、人だかりの中に今一番見たくない相手が立つていた。

昨日と違い、ふんわりと茶色の髪がなびき丁度いい感じで分けられていた。

ニコニコと周りの人に手を振り、昨日のオレ様口調とは違い、いかにも有名人ですって感じの話かたをしている。

とたんに、昨日の羞恥心がムクムクと膨れ上がってきた

「・・・あの。アイツの名前なんて言ひの?」

「アイツって・・・知り合って?」

「まあ一応」

初対面で襲われて、童貞の危機でした。なんて言えるわけがない

「ふうん。ま、いいや。君いかにも椿のタイプだからね」

「ツバキ?」

「アリア。アイツの名前は月並椿つきなみつばきって言つんだ。」

「じゃあアンタの名前は?」

ぽかんとするメガネくん

「まだ言つてなかつたけ?」

「うん」

「元紺俊輔だよ。よろしく」

「」口」と笑いかける俊輔はいかにも優等生ですって感じ。オレも少しあんな感じに笑つてみたいとあこがれる・・・。

「君の名前は？」

「えっと、藤岡涼^{ふじおかりょう}! 同じクラスになれるといいな」

「え・・?」

「俊輔つて頭いいだろ? そーゆつやつ友達にいるといなーって」

「涼? あんまりこの学園でそんなこと言わないをうがいによ

「え? なんだ?」

「いや・・・あの・・なんでもない」

変な俊輔・・・なんかあんのかな?

ぐるぐると色々なことを考へてこると、不意に頭にひんと何かが当たった

痛みに頭を抑えると、クスクスと笑う声が聞こえる。
キツと睨んで顔を上げると、昨日の男・・否。椿が立っていた

四天王サマー登場！！

優雅に高級車の中から現れ、他行の女学生にキャー キャー 言われて
さつきまでオレより遙か彼方に居たのに

なんでオレの隣にアイツが立つてんだよ！！

オレはさつと俊輔の後ろに隠れる。

ベーと舌を出して挑発すると、俊輔は笑った。

「なんでアンタがここにいるの？」

「涼の姿が見えたからついた。あ、オレの名前分かった？」

「・・・椿だろ？」

「じゃ答

満足そうに微笑むアイツ。

「うこうう笑顔を世間では『キラースマイル』って言つんだよな。

「そーいえば」

アイツは俊輔の後ろに隠れているオレの腕を無理やりひっぱると、耳元に顔を近づけて囁いた。

かあつと自分の顔が赤くなるのが分かる

「つー！なわけねーだろつーーー！」

「あれ？そーだつたけえ？たしか涼の体はきちんと反応してたよな」

「言ひなアアアアアアアアア／＼／＼！ー！」

ポカポカとアイツの体を叩いて反抗する。

「しかも、随分俊輔と仲良くなつたみたいだし」

「え？俊輔と知り合いなの？」

オレは俊輔を見ると、イヤそうな顔をして俊輔がうなずいた。

「一応……知り合い程度で」

「ひどい言い様。仮にも会長と副会長の立場なのに」

は？

までまでまで……。

「知らないよそんなの。椿がかつてにオレを副会長に推薦しただけ
だろ」

「だつてホラ、俊輔頭いいじゃん。幼馴染だし」

「幼馴染関係ない」

幼馴染？副会長？

話の飲み込めないオレは場違いな質問を一つ。

「あの・・お二人の関係は？」

「「腐れ縁で、」の学園の四天王…!…!…!」

なるほど。この学園は四天王＝生徒会役員つてことですか。あ、でもそうなるとアイツはともかく俊輔も四天王つてことかー。

俊輔毛

しゆんか？・・・・・？

「あれ、まだ涼に言つてなかつたの？俊輔」

ふらりと視界が揺れる。

あれ? ここの感覚どこかで . . .

びっくりしてオレに手を伸ばす俊輔
それを振り払つて、オレをうけとめたアイツ

考えるヒマもなく、オレは意識を失った。

四天王サマー登場ー！（後書き）

学校の始まるタイミングを失った福壱なのでしたー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6270e/>

オレとうさぎと時々アネキ

2010年11月2日01時51分発行